天地

ネットワークテーブル　538号

天地シニアネットワーク 2022. 12. 16

TENTI TODAY			1
会員の広場			2
随　筆	「銀座は親切で賑やか」「句会のお手伝いさんたちは出世した」	岩淵　彰	2
	「日々をいとおしみて」より（１）根岸をたずねて	宮川典子	3
歴　史	我が町秦野の歴史と現在（３）	北林文夫	5
歴　史	「了解日本（日本を知る）」（５）中国の旧暦、日本の旧暦	兪彭年	7
歴　史	リトアニアで１万人のユダヤ難民に日本通過ビザ発給、彼らを窮地から救済した日本の外交官、杉原千畝とはどんな人だったのか（１）	佐川雄一	１０
歴　史	山縣有朋について（１）	臺　一郎	１５
回　顧	有楽町　慕情（２）「ＧＨＱに接収されて」	津田孚人	１８
事　務　局			２１

****

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ

****

今年は、エリザベス女王の薨去、ロシア・プーチン大統領の暴挙、安倍首相の被弾死など、年初には予想しなかった事件がありました。世界各国、共通して世代が大きく変わり、協調から分裂、分断と、混乱が深まりそうな気配が濃厚です。貧困の撲滅、地球の温暖化対策など、協調なしでは解決しない難問があります。自国中心主義から、国際協調路線へ再び戻ってもらいたいものです。

****

喪中のハガキ、ご家族が喪主だとドキッとし、会って少しでも話をしておけばよかったと後悔することになります。現在見送るサイドにいますがノーサイドの笛が鳴るのも遠くはない。コロナ禍も落ち着いてきましたので、機会があれば極力お目にかかる、をモットーに新しい年を迎えたいと思っています。

****

大学時代の友人で愛知県春日井市在住の福留さんから、ご子息・福留崇広さんが最近出した「テレビはプロレスから始まった―全日本プロレス中継を作ったテレビマンたち」（発行所：（株）イースト・プレス）という新刊本を送ってくれた。内容は、プロレス、プロ野球などの中継で伸びた日本テレビ、そのＮＴＶのプロデューサー、アナウンサーなどへの取材が中心。著者は報知新聞社社員。ＮＴＶと同系列。その故か、深く突っ

込んで興味を引く内容の話が多い。天地シニア世代は、少年時代の楽しみはラジオによるプロ野球の放送、ＴＶが登場してからは、野球にプロレスが加わった。大人に混じって、街頭テレビで力道山を応援、あのころの感激は、もう味わえないと思っていたが本書を読み往時を思い出しました。

****

会　員　の　広　場

****

エッセイ　2題　　岩淵　彰　（90歳）

銀座は親切で、賑やか

　藤村は愛読書の一つ、木曽街道の宿場町はほとんど訪れている。七月封切りの映画「破戒」を観たいと思いつつ気がついたら都内上映館は＜丸の内東映＞ただ一館となっていた。しかも朝11時1日1回だけの上映である。杖を頼りのヨチヨチ歩きで地下鉄丸の内線「銀座駅」下車、階段をよろよろ上がる。

　10時半に着いたらシャッターがまだ下りている。しばらく待っていると女子係員がやってきて特別に席まで案内してくれた。509の座席数で客はなんと私一人。2時間後場内が明るくなったらもう一人いた。結局観客は二人だけ。女子係員が出口まで付き添ってくれた。映画は期待以上の秀作で若い人に是非観てほしいと願う。甘えてはいけないが高齢者にほんとうに有難い世の中になったものとしみじみ思わされた。

　小雨の中久しぶりに銀座裏の「鳥ぎん」まで足を伸ばして焼き鳥、釜飯でイッパイやった。周りは中高年の女性で満席、まことに賑やかである。

　老骨一人が釜から御飯をよそうのは照れくさいが昨今はこれも慣れてきた。兎に角感謝感謝の一日であった。

タン塩をもう一串銀座は秋　　（彰）

句会のお手伝いさん達は出世した

　新宿末広亭の10月上席は、十代目入船亭扇橋襲名披露公演であった。杖を曳いてのろのろ歩きで出掛けた。新扇橋は、扇辰門下の小辰である。

　平成四年（1992）スタートした我が『季楽句会』は、九代目扇橋師のもと俳句を学んだが、七年前師を失ってからも元気に続けて現在に至っている（この十一月で351回）。

　扇橋師ご存命までは、一門の二つ目クラスが必ずついてきて出句一覧表を巻紙に筆で清記してくれた。現在活躍中の真打も多いが、就中、扇辰師の筆が見事で駄句

も佳句に見えると評判であった。
　二つ目時代の小辰は、古典本寸法の芸で若手研精会でも出色の存在。さすが扇辰師の薫陶よろしきを得ているとみていたが、いきなり扇橋襲名とはいささかの驚きではあった。しかし「扇辰」の名は既に大看板であり、これからは若手に大名跡を継がせるのもあり、という業界事情もあったのではないか。扇辰師も快く送り出してくれたようだ。
　後日、扇辰師からの礼状に『秋とんぼ離れて軽き肩になる』とあった。愛弟子を送り出した心境を詠んで素敵な一句であった。

　九代目扇橋の一番弟子の扇遊師門下の遊一も、二つ目時代よく季楽句会にお手伝いにきていた。きちっとした話ぶりに好感を持てたが、7年前、入船亭扇蔵で真打に昇進した。去る11月6日にお江戸日本橋亭で「六代目神田伯龍17回忌追善演芸会」という会が催された。講談と落語ミックスのイベントで、扇蔵の名を見かけたのでひさしぶりに聴いてみようかと思い立った。
　出し物は「宮本武蔵火の巻より　風車」とあった。＜徳川無声＞の語りで有名なあの＜風車の段＞である。これに＜鎖鎌の宍戸梅軒＞が絡んで結構な出来栄えであった。笑いはないが新しいジャンルにも思え、その意欲に期待がたかまった。
帰りに出口で眉太い端正な容貌に武家物、講釈物にもお似合いだねと言ったら笑っていた。季楽句会をお手伝いしたころが懐かしいと言っていた。
****

エッセイ集 「日々をいとおしみて」（2022年11月）より　　宮川典子（94歳）

第1回　　根岸を訪ねて（2018年）

　エッセイクラスのTさんが＜のぼさん＞という題で、台東区根岸にある子規庵を訪れたことを書いていた。私はその近くにある根岸小学校を卒業しているので、それを読んで強烈に里心をそそられた。
　秋になって小学校同級生のMさんを誘い、根岸を訪れる夢が実現した。鶯谷駅で待ち合わせた。この駅は山の手線開通以来現在に至るまで、乗降客数が最少というだけあって、至って静かである。転落防止の柵とエレベーター、エスカレーターは備えてあるが、上野の山をすぐ前に臨むホームのたたずまいや、改札口を出るまでの古びた通路は昔のままである。
ところが改札口を出たとたん驚いた。駅のすぐそばにあった神社が無いのだ。元三島神社といって祭礼の日は学校も休みで友達と楽しんだ。日中戦争が始まってからは、担任の先生に引率され度々戦勝を祈った神社である。どこに移されたのだろうか。そこは小さな公園となり、周囲にコンビニ、ホテル、民家がぎっしり建っていて今までの

望郷の思いが少々しぼんだ。
　気を取り直して 10 分ほど歩き子規庵に着く。備えられたビデオを見て明治時代のそうそうたる友人がここに会し、俳句短歌の活動が子規を中心に展開されたことを改めて知る。親友の漱石も度々訪れている。戦災で焼けた子規庵は、戦後有志によって元通り再建された。惜しいことに、今は庭が三方二階家に囲まれている。

をととひのへちまの水も取らざりき

は他の二句と一緒に銅板にして残されている。唐紙に書いた現物は国立博物館に寄贈したそうだ。庭の棚にへちまの実が10個くらいぶら下がっていた。

　次いで、中村不折書道博物館へ行く。ここは区営の立派な建物である。後継ぎがいないため、彼の遺品は台東区に寄付された。初め、画家として大成した不折は、日清戦争の折、子規と共に従軍記者として中国へ渡った。そこでかの地の書の古典から多くを学び、彼独特の書風を築いた。
　数多くの貴重な展示品の中、目を引いたのが不折宛の漱石の手紙であった。『吾輩は猫である』を出版するに当たり、漱石は不折にその挿絵を頼んだ。障子の陰から子供の猫のしっぽを摑まえている不折の原画と共に、彼宛の漱石の達筆な礼状が並んでいる。「貴君の挿絵のお陰で本がよく売れました」と。二人の親密さを感じる。
　帰宅後、夫が趣味で集めた初刊本の複製を見たら、冒頭にその絵が載っていて嬉しかった。

　Mさんは戦前この近くに住んでいて、散歩中の不折に度々会ったことがあると言っていた。不折は昭和18年に亡くなっている。
江戸、明治の昔から根岸には文人が多く住み、大名や有名人の別荘や妾宅もあったという。下町でありながら、根岸の一画は、何となく歴史と文化の薫が漂う所だと、子供心にも感じていた。私の住んでいた所は学校へは徒歩15分の商業地区だから、余計にその違いを感じていたのだろう。
　Mさんと昔のままのこの辺りの細い道を歩きながら「ここにKちゃんとAちゃんの家が並んでいたわね。あちらの通りにはEちゃんが・・・・」などと、今から70年以上も前の同級生の顔を思い浮かべながら、話は尽きない。
　最後に根岸小学校に向かった。私たちが四年生だった昭和13年に、校舎はそれまでの木造から鉄筋に建て替えられた。上野の山の雨漏りするような仮校舎から、真白な三階建ての新校舎に戻った時は、勉強に一層精が出たはずである。
　その校舎がいつの間にか薄いぶどう色の煉瓦作りに変わっている。そして¨入り口が半分鍵がかかっているようでなかなか開かない。がたがたやっていたら、校務員ら

しい人が開けてくれ、一応中に入ることが出来た。そこはまるでホテルのような広いホールだ。昔から小学校といえば誰でも出入りは自由、入り口に下駄箱が一斉に並んでいたのに、なんという違いか。

しかし戦前は自由に訪問できた学校が、現在は予約なしでは入れないことを知った。Mさんも私も一番の目的であった小学校を見ることが出来ず、急に疲れを感じた。彼女は千葉県八千代市から、私は世田谷区からはるばる出て来たのだが、今後の再訪はとても無理だろう。

****

我が町・秦野の歴史と現在（3）　　北林文夫　（85歳）

秦野の河川

河川の流路の変遷

約100万年前ごろ、丹沢山地の形成とともに、水無川など河川が生まれていきます。いずれの河川も西の酒匂川を含めて、金目川、葛葉川、水無川、四十八瀬川は南の中井、二宮に流れていました。

これが30～15万年前以降、大磯丘陵が隆起して、そして4万年前以降渋沢丘陵が隆起し、金目川上流、水無川が4万年前から中村川から葛川に、3万年前四十八瀬川が中村川から川音川に流路を変えました。

さらに渋沢断層により、渋沢丘陵が隆起し、2万年前、葛川に流れていた金目川上流が平塚に流れていた金目川に、水無川、葛葉川もまた流路を変えて金目川に合流して流れるようになりました。

参）

こうした流路の変遷を「河川の争奪」と言います

［金目川］　源流　蓑毛の春嶽山、大山

丹沢山地の春嶽山（949m）、大山（1251．7m）に源を発し、蓑毛の集落に沿って南下し、葛葉川、水無川、室川などと合流して相模平野を東に流れ、鈴川、渋田川、河内川と合流し、花水川となり平塚市の西の唐が原で相模湾に注ぐ流路全長19．5kmの二級河川。流域の水源として重要な役割を果たしています。金目川は、江戸時代の「新編相模風土記稿」では、加奈為可波または加奈比可波と読んでいます。

中流の下大槻で取水された全長1．4kmの農業用水は、北側の河岸段丘沿いに流れています。段丘沿いには古代の横穴墓が見られます。

参）河岸段丘：

土地の隆起、海面の低下、河川の浸食力が増して川床を削ったために出来た階段

状の地形、を河岸段丘と言います。平坦な部分を段丘面と言い、旧川床に堆積した砂礫層とその上に覆ったローム層からなります。

［葛葉川］　源流　三ノ塔

　　秦野市の東部に位置する金目川水系の二級河川で、全長6．22km。源流は丹沢山系の三ノ塔（1205．2m）で葛葉沢をつくり、菩提北部地区の四山橋上で新田川と合流して葛葉川となります。そして横野方面から流れる唐沢川が上葛葉橋下で、さらに矢坪沢が小羽根橋で合流して中流となり南東に流れます。

このあたりから右側（西側）に、菩提、三屋、曽屋の工業団地が、左岸（東側）は、西田原、東田原の住宅地と豊かな耕作地が広がっています。葛葉大橋から下流は、深さ10～40m前後の峡谷となり、蛇行して流れていることから九沢と言われています。国道246号線の新九沢橋を経て落合橋の下で金目川と合流します。

峡谷は「葛葉川ふるさと峡谷」と呼ばれ、峡谷を挟む地域は「葛葉緑地」として1987年「かながわのナショナル・トラスト」第一号に指定されて、保存緑地となっています。

［水無川］　源流　塔ノ岳

　　丹沢山地の塔ノ岳（1490．9km）に源を発し、秦野盆地の中央を南東に流れ室川と合流、金目川に注ぐ全長7．5kmの河川。この川は、上流に当たる扇頂の戸川付近で水の流れが地下に浸透し伏水流となって扇央のあたりの地表の流れは僅かになり、扇端で湧出するという地下に潜る文字通り水無川となっています。

参）水無川三大堰堤（2003年に国の登録有形文化財）

　上流の山ノ神堰堤から取水して西岸側に堀山下用水、東側に戸川用水がつくられています。この堰堤のほかに上流に猿渡堰堤と下流の戸川堰堤があります。

　これら三大堰堤は、1932年（昭和7年）に北伊豆地震による丹沢水系の山崩れを契機として建設された砂防堰堤です。

［四十八瀬川］　源流　鍋割山

　　丹沢山地の鍋割山（1273m）に源を発し、秦野の西部を北から南に流れ、松田町の中津川と合流し、川音川を経て酒匂川に注ぐ全長7．85kmの河川。河川名は四十八もの多くの瀬がるという意味で名づけられたとのことです。河川の沿岸には、西側に三廻部用水、東岸側に堀用水の二本の用水路が整備されています。三廻部用水は、芭蕉堰堤から取水、全長1．1kmあります。

500年前室町時代に作られたものです。用水は、川岸段丘上に作られ、水田の耕作が行われたのです。

［室川］　源流　千村

　　千村の千蔵寺付近に源を発し、秦野盆地の南縁を渋沢断層に沿って南地区の各湧水を集めて西から東に流れて、水無川と合流する5kmの河川。川幅は狭いものの水量が豊富でかつては水車が精米や製粉に活用されたとのことです。下流部では、根下用水が作られました。

［大根川］ 源流　弘法山、権現山

　　弘法山に源を発し、伊勢原の善波川を合流する全長３．０６kmの河川。この流域から鶴巻の地域は過去には水はけが悪く、低湿地帯で「どぶっ田」と言われましたが、土地改良事業が推進されて、鶴巻から伊勢原、平塚につながる水田は湘南の豊かな穀倉地帯となっています。時節になると丹沢の山々を背景に緑の美しい稲田は、多くの方に親しまれています。

またこの流域は、宅地開発が盛んに行われ、秦野の河川の中で最も汚染されていましたが、近年下水管理が行われ、河川の整備も進み、大根公園が設置されて野鳥も訪れる環境になっています。

［善波川］ 源流　伊勢原善波地区

　　秦野市の鶴巻地区と伊勢原の境を流れて大根川に合流する延長１．５kmの河川。河岸には鶴巻の地域の市民により、大根川とともにアジサイが植えられ、遊歩道となっています。　　（つづく）

****

「了解日本」(「日本を知る」（第５回）　　俞彭年　（８５歳）

第１章 中国の旧暦、日本の旧暦

太陽暦、太陰暦、陰陽暦

　暦とは、年、月、日で時間を計算する方法で、世界の暦は大きく 3 種類に分けられる。第１暦として、太陽暦と呼ばれる天体現象に基づく年・日の計算で、地球が太陽の周りを回る時間（365・24219 日）を 1 年とし、平年は 365 日、閏年は 366 日（閏日のある年を閏年といい、4 年ごとに 2 月末に 1 日が追加されその日を閏日と呼ぶ。

1 年を 12 ヶ月に区切る，エジプト暦、ペルシャ暦、マヤ暦、ローマ暦、ユリウス暦、グレゴリオ暦はすべて太陽暦に属するが、それぞれにいくつかの違いがある。

　第２暦として、天象を基にした太陰暦で、月の満ち欠けの周期で、朔望月（29 日 12 時間 44 分 2 秒）を 1 カ月とし、30 日の大月と 29 日の小月があり、12 カ月を 1 年として、1 年は 354 日または 355 日とする。グレゴリオ暦(イスラム暦)は太陰暦である。

　第３の暦は、天象に基づく太陰太陽暦とも呼ばれ、月相周期で 1 カ月とカウントして、閏月（3 年に 1 度、5 年に 2 度、19 年に 7 度、閏年に加える月を閏月、閏月のある年を閏年と呼ぶ）を設定し、1 年の平均日数が太陽年の日数と一致させるようにしたものであり、月の満ち欠けや、太陽の周りを回る地球の動きに対応した暦である。

バビロニア暦、ギリシャ暦、ユダヤ暦、インド暦、中国暦（太陰太陽暦）、日本暦（旧暦）は、すべて太陰太陽暦に属するが、その間にもたらされる地域的な差異が存在する。

　３つの暦にはそれぞれ特徴があり、その作成は人類が生活する自然環境によって決定される。

カレンダーは文明の産物であると同時に、文明の表現でもある。現在、国際カレンダーはグレゴリオ暦（1582 年にローマ教皇グレゴリウス 13 世が命名）とも呼ばれ、1 年を 365 日として 12 カ月に分け、1、3、5、7、8、10、12 月を大月とし 1 カ月が 31 日、4、6、9、11 月を小月として1カ月が 30 日、2 月は 28 日となっている。

地球が太陽の周りを公転する周期は 365 日 5 時間 48 分 45 秒（太陽年）なので、400 年に 97 回の閏年があり、2 月末に 1 日追加されて 366 日の通年となるのである。閏年は、西暦年を 4 で割り切れる年（例：1960 年）、平年を 100 で割り切れる年（例：1900 年）、閏年を 100 だけでなく 400 で割り切れる年（例：2000 年）として計算している。

暦年は、イエスの伝説的な誕生年から計算されている。イスラム暦（回教）は太陰暦の一種で、1 年を 12 ヶ月に分け、単月を 30 日の大月、複月を 29 日の小月とし、平年を 354 日、閏年を 355 日とし、30 年のうち 11 回は閏年で、閏月がない。イスラム教の創始者ムハンマドが宗教的迫害を受けてメッカからメディナに移った翌日、すなわち西暦 622 年 7 月 16 日が、イスラム暦の元年の初日とされている。有名なラマダンの月は、イスラム暦の 9 月である。

中国の伝統的な暦は太陰暦で、私たちは通常この暦を旧暦と呼んでいるが、これは夏王朝の時代に成立したと言われているため、夏暦とも呼ばれている。旧暦は陰陽暦（太陰太陽暦）の一種で、平年は 12 ヶ月、大の月が 30 日、小の月が 29 日、1 年は 354 日または 355 日（どの月が大でどの月が小かは年によって異なる）である。1 年の平均日数が太陽年と約 11 日異なるため、19 年に 7 回の閏月が設定され、閏月のある年は 1 年が 383 日または 384 日になる。

また、太陽暦の 1 年を太陽の位置によって 24 の祭りに分割し、農作業をしやすくしている。春夏秋冬は、1 月から 3 月までが春、4 月から 6 月までが夏、7 月から 9 月までが秋、10 月から 12 月までが冬と明確に区別され、24 節気が季節を表している。

閏月は季節調整により、春か夏か秋か冬か、どの季節に置かれるか。年は天の茎と地の枝の組み合わせで表記され、60 年周期で繰り返される。中国の伝統的な暦は、農業に適した自然暦であることから太陰暦と名付けられ、朝鮮半島、日本、琉球、ベトナム、モンゴル、西洋に広まっていった。

日本の旧暦と中国の旧暦

明治維新（1867 年）からわずか 5 年後の 1872 年（明治 5 年）11 月 9 日、明治政府は突然「改暦の詔書」と「太政官布告」を発し、それまで使われていた太陰暦（実際には太陰太陽暦）を廃止し、代わりに太陽暦であるグレゴリオ暦（グレゴーリア暦）を導入し、明治 5 年 12 月 3 日を明治6年1月 1 日とした。これにより、日本の歴史から明治 5 年 12 月 4 日から年末までは消えた。

この詔書では、当時それまで使われていた暦を旧暦と呼び、導入される太陽暦（＝

グレゴリオ暦）が太陰暦（実際は太陰太陽暦）よりもはるかに正確であると述べ、これまでの暦の下段と中段の暦注は不合理で理屈に合わなくでたらめで知的発展の妨げになると非難しているのである。

『太政官布告』では、節句などの月の日付は変換せずにそのまま新暦に適用することを定めた。例えば、グレゴリオ暦 1 月 1 日は元旦、グレゴリオ暦 3 月 3 日はひな祭り、グレゴリオ暦 5 月 5 日は端午の節句、グレゴリオ暦 7 月 7 日は七夕、グレゴリオ暦 9 月 9 日は重陽節となった。

この突然の暦の変更には、確かに欧米列強の圧力などさまざまな理由や正当性があったが、直接的な原因は当時の財政難にあったと言われている。役人の給料はすでに月給制に変更されており、明治 6 年は 6 月が 2 回ある閏年なので、1 年間に 13 カ月分の給料を支払わなければならないので、暦を変更すると、明治 5 年の 12 月分の給料は支払いをしなくてよくなり、また太陽暦の明治 6 年には閏月がないので、1 カ月余分に給料を支払う必要はないのである。

当然、歴史の流れから見ても、明治維新によって中国文化から脱却し、西洋文明へ急速に向かうという流れ、日本がアジアからヨーロッパへ向かうという流れに沿った改暦となったのである。突然の改暦はもちろん、すでに印刷されていた明治 6 年のカレンダーはすべて廃棄されることになり、長年使われてきた天保暦（江戸時代の天保 13 年、1842 年に編纂された中国の旧暦に基づく暦）は非科学的で迷信的だと言われ、新しい暦は未知数で社会は大混乱に陥った。

文明開化を唱える福沢諭吉ら知識人が、太陽暦がいかに優れているか、いかに便利で合理的かを説いたパンフレット「改暦論」である。このパンフレットはわかりやすく、評判もよく、当時は 20 万部以上売れたといわれている。

ちなみに、グレゴリオ暦は、大韓帝国（朝鮮王朝）では 1895 年、中国では 1912 年（辛亥革命の翌年）に導入された。つまり、日本では 1872 年 12 月 2 日まで旧暦が使われていたことになる。旧暦は日本で 1269 年間使われ、日本の四季の移り変わりを映し出し、農民の実りある生活の指針となっていた。なお、日本では旧暦を太陰暦と呼ぶ人がいるが、実はこれは間違いで、太陰暦と陰陽暦は別の暦であり、日本はかつて太陰暦ではなく、陰陽暦の一つ（太陰太陽暦）を使っていたのである。

日本が言う旧暦とは、基本的に中国の旧暦のことで、漢字と同じく中国から伝わったものである。日本の歴史書によると、暦の日付が初めて使われたのは、推古天皇 12 年（西暦 604 年）の甲子 1 月 1 日の「御書」に記載されており、この日から日本では公式に暦が使われたことになり、604 年以前の日本には公式に認められた暦はなかったことになる。

当時の摂政は聖徳太子で、『日本書紀』によれば、同年 4 月 3 日、聖徳太子は

十七条の憲法を制定した。越年はすべての始まりの年として使われ、これが暦の始まりとなった。正式に暦が制定されたのは日本の持統 4 年（690 年）で、11 月に「南宋の元号暦と唐の易断暦を実施する」という法令が出されたことが『日本書紀』に記されている。

南宋の何承天が編纂した元嘉暦と、唐の李春峰が編纂した儀風暦（中国では麟徳暦）がある。日本では元夏、儀鳳のほか、大安（唐の僧・戴大の編纂）、武帝（唐の郭先之の編纂）、宣明（唐の徐安の編纂）の暦が使われていた。 日本の遣唐使（唐への使者）は、帰国時に唐暦を持ち帰った。

例えば、西暦 717 年（日本の養老元年）に吉備真備が阿倍仲麻呂とともに遣唐使として唐に渡り、西暦 735 年（日本の天平 7 年）に帰国した際、大安暦 1 巻、大安暦立正 12 巻、影を測る鉄尺 1 本を持ち帰ったという。894 年（寛平 6 年）、菅原道真の提唱により、日本の朝廷は唐への使節派遣を中止し、その結果、中国の改暦の情報源は絶たれた。

江戸幕府は改暦を決定し、渋川春海に暦の編纂を命じた。1685 年、渋川春海が日本と中国の緯度差を考慮した「貞享暦」を編纂し、70 年間使用されることになった。その後、3 回のカレンダー変更があった。最初は 1755 年（宝暦 5 年）に安倍泰邦が宝暦暦を編纂し、43 年間使用したのが始まりである。2 回目は 1798 年（寛政 10 年）、高橋らが寛政暦を編纂し、46 年間使われることになった。3 回目は 1844 年（天保 15 年）、渋川敬助らが天保暦を編纂し、29 年間使われた。貞享暦、宝暦暦、寛政暦、天保暦は日本が独自に編纂した暦なので、日本人は「大和暦」または「国暦」と呼んでいる。

西暦 604 年から西暦 1872 年までの 1269 年間に日本で使われていた暦は太陰太陽暦で、西暦 1685 年以前は中国の暦が使われていたが、1685 年以降は中国の暦が使えないため、日本人は中国の暦をもとに独自の暦、国暦を編纂しなければならなくなった。最後の国暦は天保暦で、現在日本で一般に旧暦と呼ばれているものは、特に天保暦である。

日本人は古くから暦が好きで、江戸時代から様々な暦が存在し、大小の月だけの「大小暦」、文盲の農民のための「絵画暦」、文盲ではない人々のための「文字暦」など、当時は 400 万部も発行されたと言われている。旧暦の時代には、京都の暦のほか、丹生暦、伊勢暦、南都暦、泉州暦、三島暦、大宮暦、江戸暦、仙台暦、会津暦、薩摩暦、南部絵画暦など、多くの公式な地方暦が存在した。

（2011年9月4日）

（つづく）

****

リトアニアで１万人のユダヤ難民に日本通過ビザを発給、

彼らを窮地から救済した日本の外交官；杉原千畝とはどんな人だったのか

佐川雄一（８５歳）

第１回

はじめに

1939 年 9 月 1 日、ドイツ軍がポーランドに侵略すると “対ポーランド援助条約“ に調印していた英国とフランスは、ヒトラーに対する宥和政策を見切り、対独戦を宣言、茲に第 2 次世界大戦が始まった。

開戦直後は暫く小康状態が続いていたが、1940 年 5 月、突如、西ヨーロッパで、ナチスの電劇攻撃が始まると、その余波を受けて、ポーランド在住のユダヤ人の一部にナチスの監視を逃れて、隣国のリトアニアに避難する動きが起こった。その中にはシベリア鉄道経由、日本を通過、アメリカ、カナダ、パレスチナ、等に渡るべくリトアニアのカウナス日本領事館で日本通過ビザの取得を求めるユダヤ人たちがいた。

日本通過ビザを求める動きは 1940 年 7 月 18 日から始まっていたが、その 2 週間後の 8 月 2 日も、ユダヤ人避難民の長い行列が領事館前にできていた。そのなかにワルシャワから数週間かけて逃れてきた 26 歳の弁護士；レオン・イルトビッチがいた。

杉原千畝
リトアニアのカウナス領事館

領事代理；杉原千畝（ちうね）がレオンの顔を見上げて微笑するような表情で日本通過ビザの署名入りパスポートを手渡す杉原の表情をレオンは 50 年経った今も忘れないでいる。

彼は、その後、何千ものユダヤ人と一緒にソ連を通過し、日本を経由してアメリカに渡り、新しい土地で生活を始めることができた。

その後、アメリカの市民権を得て妻と一緒にニューヨークで暮らしているが、『もしも杉原の助けがなかったら』 と語り出すとき、彼はほかの生存者と同じように声をひそめた。

杉浦千畝は 1939 月 8 月 28 日、ヘルシンキのフィンランド公使館から領事代理の肩書でリトアニアのカウナスに着任した。といっても、館員は杉原ひとり、すべて 1 人で新領事館の開設準備をしなければならなかった。

それから僅か 4 日後の 1939 年 9 月 1 日、ナチスドイツがリトアニアの隣国；ポーランドに侵略する。さらに半月後の 9 月 17 日、独ソ間の事前合意に基づいてソ連軍はポ

ーランド東部に侵略、ポーランドはドイツ軍とソ連軍に分割支配されることになった。この時点で、ナチスドイツ占領下のポーランドではドイツ軍によるユダヤ人に対する迫害が始まっていた。
他方、リトアニアであるが、1939 年 8 月、独ソ間で締結された不可侵条約でバルト三国（ラトビア、エストニア、リトアニア）はソ連の占領地域とする合意があったので、リトアニアは 1940 年 6 月、ソ連に併合された。このような背景があって、ソ連の出先機関は、ソ連の直接支配下となったリトアニアに、外国の領事館を置く正当性を認めず、領事館開設から僅か 10ヵ月後にはカウナスの日本領事館は閉鎖を迫られることになった。

1. **杉浦千畝が活躍した満州・ヨーロッパの駐在時代を振り返る**

ここで杉原千畝が 22 年間過ごした満州とヨーロッパの駐在時代を振り返ってみたい。

1919 年、満州のハルピン市に創設された国立日露協会学校（ハルピン学院）に第一期生として入学するが、その後の外務省勤務も含め、杉原の満州での生活は 15 年に及んだ。杉原がハルピン学院に入学したのは、「学費タダ、生活費支給」の経済的理由があったが、入学後は、ロシア語の習得と超大国；ロシアのスペシァリストに、そして、ロシアの良き友人になる高邁な理想を掲げて勉学に励むことになった。そのため、杉原は、ロシア語を徹底的に勉強した。杉原はロシア人の気質・文化・慣習をより一層深める目的もあったと思うが、1924 年、白系ロシア人と結婚し、ロシア人社会との交遊を広める努力も怠らなかった。杉原の生き様は、当時の日本軍部・官僚・産業人とくらべると明らかに異なっていたが、これこそが杉原が満州で学び実践した行動規範であった。
15 年間に及ぶ満州滞在中、杉原が関与した最大の案件は、ソ連・中国が共同運営する北満州（東清）鉄道の買収交渉であった。満州国が日本の傀儡政権になって以来、ソ連にとって北満州（東清）鉄道を所有・運営するニーズが減少していた。日ソ間で交渉が始まり、杉原は満州国外交部次長大橋忠一（その後、松岡洋右外務大臣の下で外務次官に昇格）の補佐として会議に参加、日本側代表；外務省東郷茂徳（その後、ソ連大使、大戦中は外務大臣）の通訳官として交渉に立ち会った。
厳しい駆け引きが 2 年間（1934～35 年）続いたが、杉原が事前に時間をかけて買収の適正価格算出のため、北満州（東清）鉄道の現状・問題点（旅客者数、貨物の量、貨物輸送の正確さ、他）を整理していたので最後は日本側も満足する条件で買収が成立した。但し、この交渉を通してソ連側交渉団のヘッドが、杉原のロシア語能力、ロシア事情の精通度などに感嘆するとともに、杉原の存在感に脅威を感じたという。

満州の次に杉原が希望した勤務先は、モスクワの日本大使館であった。それまで、

満州で営々と蓄積したロシア人とロシアに関する知識がモスクワで活用できると、杉原は確信、外務省もそのように捉えて、1935 年末、外務省は杉原のソ連大使館勤務を決定した。しかし、ソ連政府が、杉原の反革命的な白系ロシア人との親交を理由に、ペルソナ・ノン・グラータ（好まれざる人物）を発動して杉原のモスクワ赴任を拒絶した。

外交上、この種の行為は稀有のこと、この事実は当時の日本のメディア（朝日新聞、毎日新聞、中外商業新報；現・日本経済新聞、他） で、又、米国紙にも報道された。

ソ連政府受け入れ拒否の背景には、ソ連が日本に売却した北満州鉄道の交渉に立ち会ったソ連側責任者；カズロフスキーが、ロシア語に堪能でソ連事情に通じた杉原の実力に脅威を感じ、杉原の駐ソ日本大使館勤務を拒否するようソ連政府に働きかけたのである。これだけ見ても杉原の凡庸ならざる能力が推理できる。モスクワの穴埋めと言うわけではないが、杉原は 1936 年 4 月～9 月の間、ソ連の僻地；カムチャッカ半島のウスカムに赴任する機会があった。これが戦前、戦中、唯一のソ連駐在（抑留生活と戦後のモスクワ駐在を除く）になった。

そのような環境変化の下で、1935 年 12 月 30 日、白系ロシア人；クラアウディア・アポロノフの求めに応じて 12 年間続いた結婚生活に杉原は終止符を打ち、双方合意の下に離婚する。そして 1936 年 4 月 7 日、杉原千畝は再婚、相手の名は菊池幸子（ゆきこ）。幸子は 23 歳、千畝より 13 歳年下であったが、高学歴の家庭で育ち、千畝との結婚生活は順調に経過した。

他方、このころのヨーロッパに目を向けると、嵐の核はドイツであった。1933 年、アドルフ・ヒトラーがドイツの政権を掌握、首相に任命されると国民の支持基盤が広がり、独裁体制を強めていく。そして、1935 年 3 月には、敗戦国ドイツに巨額の賠償を課したベルサイユ条約を破棄して、ドイツの再軍備を宣言した。ヒトラーの出現でドイツの軍事力が増強すると、日本は、満州国周辺でのソ連軍の動きに加え、東欧でのソ連軍・ドイツ軍の動静についても諜報活動を強めることになった。このような背景もあって、杉原は、長い満州生活（1919～’35 年）に終止符を打つことになった。

杉原のヨーロッパ駐在であるが、1937 年 9 月のヘルシンキ着任からカウナス、ベルリン、プラハ、ケーニヒスベルク（現在のカリニングラード）、そして 1945 年 8 月、ブカレストで日本の敗戦を迎えるまで、延べ 8 年間、ドイツ軍、ソ連軍に監視されながら徹底して諜報活動に励んだ。諜報活動は、現地事情に精通し、情報提供者との信頼関係を築き、危険な現場で業務を遂行する強靭な精神力と優れた語学力が求められるのでこの任務に耐えられる外交官・武官の数は限られていた。杉原はこの過酷な業務を全うできる一人だった。一方、夫人；幸子は、幼い子供・赤ん坊の世話を手伝ってもらうため、ヨーロッパには妹の節子を同行した。尚、この時期の杉原千畝の活動を世

界が崇敬するのは、彼の抜群の諜報能力に対してではない。人道と博愛の精神で多数のユダヤ難民に日本通過ビザを発給、彼らの生命を救った杉原の勇気ある決断・行動であった。これについては後述する。

独ソ不可侵条約が 1939 年 8 月、ドイツとソ連の間で締結されたが、それから 2 年後の 1941 月 6 月、ドイツ軍は不可侵条約を破棄してソ連に攻め込んだ。

ケーニヒスベルグ総領事館　杉原家族と職員
（現在のカリニングラード、ソ連の飛び地）

ここで杉原の諜報活動についてひとつの逸話を披歴したい。日本から派遣された武官は、ドイツが不可侵条約を破ってソ連を侵略するのは時間の問題であると予測していたが、それがいつになるのか、欧州各地で懸命に情報収集活動を行っていた。これに対し、ドイツ軍幹部は日本の武官に、近い将来、英国を侵略すると伝え、港湾に待機する軍艦等を披歴するなど英国侵略が近く実行されるイメージを創りあげ、ドイツ駐在武官の注意を逸らすことに努めていた。そんなことがあって、ドイツ駐在武官たちは、最後の最後まで、ドイツ軍は英国上陸を最優先し、次にソ連との戦端を開くと信じていた。他方、ドイツ政府首脳部の対応であるが、ドイツ軍のソ連侵攻準備がすべて整った段階で、ヒトラーは大島浩駐独大使（陸軍参謀本部出身、駐独大使在任期間 1938・10-39・8, 1941・2-45・8）にソ連侵略の計画を暗示（6 月 6 日）したが、軍事計画の細部まで漏らすことはなかった。

この当時、杉原は、独ソ国境に近い、東プロシアのケーニヒスベルク総領事館（現在のカリニングラード、総領事官と言っても名前だけ、日本人は杉原一人のみ）に勤務、大島駐独大使の有力な情報源になっていた。杉原は、ヒトラーが大島大使にソ連侵略を暗示する約 1 ヵ月前の 5 月 9 日、松岡洋右外務大臣（と大島大使）宛にソ連国境沿いのドイツ軍の活動が緊迫化しつつあり、独ソ戦は 6 月に始まると以下の電報を打電した。

『ベルリンから当地に連日北行するフランス製軍用列車（フランスから奪った）。東プロシア（ケーニヒスベルク総領事館の所在地域）に大兵が集結。**6 月開戦の模様**。将校は地図判読程度のロシア語習得の義務。ピラウ港に 30,000 トン級一隻、他 10 隻の汽船停泊中。独軍戦車国境線に集結、ソ連もこれに対峙。避難民の軍歴、官吏経歴調査続行。密派された大佐の名。ソ連は対プロシア国境の無人地帯拡大。鉄道乗務員は奥地の新人と交替。4 月初めより追加招集が実行された地域。ソ連国境駅に

極めて大量の穀物到着』

杉原がこのようなビビッドな情報を本省に報告できた背景には、第一級の現地諜報員をカウナスで採用したことが指摘できる。なぜ！第一級の現地諜報員を採用できたのかであるが、日本とポーランドの間には長期にわたる軍事上の信頼関係が築かれていたので、杉原はポーランド諜報機関トップ（M. リビコウスキー大佐）に近づき支援を要請、これが上手くいって、カウナスで二人のポーランド人情報収集プロ（将校）を雇うことができた。そのうちの一人、A. ダシュキエビッツ中尉（通称ベルツ）は、カウナスから杉原と一緒にベルリンとプラハに、その後ケーニヒスベルク総領事館に移動、総領事館内で寝食をとともにしていた。あとの一人、A. ヤクバニエッツ大尉（通称クバ）は、カナウスを離れた後、杉原とベルリンに移動、ここで駐独日本大使館に通訳として採用された。彼らは、第一線の情報を現場で収集、杉原に提供、杉原も彼らの能力を高く評価した。

しかし、彼らは日本・英国の二重スパイ（ポーランドは英国の同盟国）であったので、独ソ軍の現場情報を杉原にインプットすると同時に、同じ情報が、英国のカウンターパートにも届けられていた。只、独ソ戦が始まると、諜報部員の一人；クバは悲劇に見舞われた。ゲシュタボ（ドイツ秘密国家警察）に捕まり、殺害されたのである、他方、ベルツであるが、危機を察し、直ちに総領事館を離れ、戦後まで生き延び、回想記を残している。

（つづく）

****

山縣有朋について−その1−　　臺　一郎（74歳）

前総理の菅義偉が安倍晋三元総理の国葬における追悼で、安倍氏が衆議院第一会館の 1212 号室の机の上に読みかけの本を一冊残していたというエピソードについて語った。安倍氏はその本の中の、山縣有朋が長年の友人でありライバルでもあった伊藤博文がテロリストによって暗殺されたことを深く悲しんで読んだ和歌の部分に、鉛筆で線を引いていたことなどを紹介した。菅はまたその本が政治学者岡義武の著書「山縣有朋」であったことも紹介した。安倍と山縣は共に長州人であり、二度にわたり総理をつとめたという点も同じである。だからこそ安倍は岡義武の山縣有朋を読んだのだろう。

故安倍元総理は歴代総理の中で総理在任期間がもっとも長く、また銃により射殺という死に様があまりに衝撃的であったことなどから、菅前総理がエピソードとして紹介した「山縣有朋」という長州人や岡義武の著書が人々の関心を引いたようだ。岡の

本は注文や売り上げが急増したに違いない。我が家近くの大型書店にも在庫はなく、漸く見つけたのは伊藤之雄著の「山縣有朋」であった。岡義武の「山縣有朋」に比べて、伊藤之雄の「山縣有朋」は山縣に対する人物観や人物評がより中立的で公平であることを最近知った。

さて、伊藤之雄著の「山縣有朋」は、軍人として明治維新を推進し、維新後は長州閥の軍事及び政治的リーダーとしても明治・大正の日本の国家統治を支えた、山縣有朋の足跡や役割等を分析紹介した文藝新書の本である。本文だけで 470 ページ以上という相当分厚い本で、しかも著者の伊藤之雄氏は京大の教授。すなわち学者であって作家ではない。よって本は面白おかしくではなく、丁寧に真面目にそして分析的に山縣の人物像を書いている。ために、僕は読了するのにかなりの日数を要してしまった。以下は、主にこの本の内容を手がかりにして僕なりに理解した明治の元勲山縣有朋の人物像である。

山縣有朋は伊藤博文、黒田清隆、井上馨、大山巌らと並ぶ明治の元勲第二世代の人物だ。ちなみに第一世代は大久保利通、西郷隆盛、木戸孝允の三人である。軍人であり、のちに政治家ともなった山縣は、元帥にして終身現役の陸軍大将であり、更に 1889 年から 1891 年と 1898 年から 1900 年の二度にわたり総理大臣を勤めた。にもかかわらず、近代日本の歴史上の人物としては、生前も没後も凡そ国民的な人気がない。

彼は国家のために相当頑張った筈なのに、誉められることも尊敬されることも少なかった印象があり少し気の毒な感じがする。山縣は大正 11 年(1922 年)2 月 1 日に 86 歳で亡くなったが、葬儀は 2 月 3 日に国葬として行われた。高橋是清を総理とする当時の内閣は 10,000 人の弔問者を見込んだが、実際に弔問に訪れたのは 1000 人にも満たなかったという。なぜそこまで不人気であったかと言えば、山縣は旧長州藩出身者を中心とする軍人、官僚、政治家の強力な派閥を作り、彼らを使って様々な策謀を弄したという、いわば悪役的なイメージを持たれたからとされている。

伊藤之雄氏は著書の中で、山縣が明治の始まりから大正期までにわたった国政や軍事における役割と実績、それらの調査分析を通じて明らかになった山縣の人となりや性格、さらには和歌や造園など多彩な趣味を持つ文化人としての一面などを、丹念で丁寧な資料の読込みや考察によって公平な目で描き出している。伊藤の記述する山縣像は、ひと言で言えば、まさに「愚直」な人物であり、その芳しくない評判からは見えづらい、立憲君主制国家たる 19 世紀末期から 20 世紀初頭の明治日本を懸命に支えようとした武人像・政治家像なのである。

では山縣有朋のプロフィールを簡単に紹介しよう。

山縣有朋は1838年6月、旧暦で言うと天保九年四月二日に長門国の萩において、毛利藩の下級武士山縣有稔（ありとし）を父に、松子を母に山縣家の長男として生まれた。母は山縣が五歳の時に亡くなり、その後は厳格な祖母により育てられた。山縣の幼名は辰之助、通称は小助で、1864 年以降は狂介、狂助、狂輔などを用いたが、1871 年以降は有朋の諱（いみな）を称していた。成人となってからの山縣は、身長が171.センチと当時の日本男子としては相当に高い。以前にやはり読書感想で紹介した、日露戦争当時の外務大臣でポーツマス講和会議の主席全権でもあった小村寿太郎は身長 156 センチとかなり小柄だったが、次席全権の高平小五郎も 160 センチあるかないかだったので、小村が異常なほどに小柄だったわけではない。そう考えると山縣の 170 センチ超えは当時としては非常な長身であった。

山縣は 15 歳で元服し、父親と同じ毛利藩の下級藩士として藩校明倫館の手子役（下働き）などをつとめた。青年となってからは尊皇攘夷思想に傾倒し、1860年頃には同じ毛利藩の英才久坂玄瑞から推薦を受けて、吉田松陰が塾長を努める松下村塾に入門し、そこで既に塾生であった高杉晋作や伊藤博文らと知り合った。その後高杉が奇兵隊を創設すると山縣も参加し、軍監となって幕末動乱を戦った。旧幕府方の抵抗勢力を追討する戊辰戦争では参謀として活躍し、その功績で明治3年（1870 年）には兵部少輔（陸軍次官クラス）となった。

その後は兵部大輔、陸軍大輔を経て、明治 6 年(1873) には陸軍卿（陸軍大臣）に就任し、明治 11 年には参謀本部長になるなど出世街道を着実に駆け上がっていった。山縣は軍の幹部となってからも前線で戦うことをいとわなかったが、客観的には参謀や組織リーダータイプの人間であり、明治 16 年に内務卿、18 年には第 1 次伊藤博文内閣の初代内務大臣に就任し、中央集権的な地方制度の確立等に努めた。明治 22 年（1990 年）には総理大臣として第 1 次山縣内閣を組織した。その後第 2 次伊藤内閣で司法相、陸相を務めてから、枢密院議長などを歴任して、明治 31 年（1899 年）には第 2 次山県内閣の総理大臣に就任した。1904 年に勃発した日露戦争では参謀総長として作戦指揮にあたり、戦後は元老として「山県閥」を形成して、政界への影響力を強めていった。

現役時代に山縣が尊敬した人間は、短期間ではあるが松下村塾で直接指導を受けた吉田松陰、そこで巡り会ったひとつ年下だが藩での身分は高く奇兵隊を創設した高杉晋作、薩摩藩で大久保利通と並ぶ維新派のリーダーであった西郷隆盛などである。特に吉田松陰は山縣が生涯にわたって「自分は吉田の弟子」と言い続けるほどに

深く尊敬した。また西郷隆盛は薩摩藩の人間であったが、その人格や器量に心酔し、その後西郷が下野して政府との関係が悪化しても慕い続けたために長州藩維新派のリーダーであった木戸孝允の不興を買い、伊藤博文に比べて出世が遅れたりもした。

山縣の友人と言えば、なんと言っても同じ長州藩の下級藩士で 3 歳年下の伊藤博文だろう。時にライバルとなり、時に政敵に似た存在ともなった伊藤博文とは 50 年間にわたり交友が続いた。明治 42 年に伊藤博文がハルピン駅頭で朝鮮人独立運動家に暗殺されたことを知った山縣は深く悲しみ、以下のような和歌を詠んだ。

かたりあいて尽くし人は先立ちぬ　今よりのちの世をいかにせむ

冒頭に触れた、菅前総理が安倍元総理の国葬で紹介したエピソードで、安倍氏が読みかけの岡義武の著書「山縣有朋」の中で鉛筆で線を引いていたのは、まさにこの和歌であった。（以下は次回に続く）

****

有楽町　慕情　（2）　　津田孚人（85歳）

「GHQ」により接収される

日本政府からの接収命令は9月10日の月曜日に着いた。地上全階を15日（土曜日）正午を期限として明けること、書類を除き家具その他一切の物の持ち出しを禁止する、という厳しいものだったが、GHQから政府へ申し入れた公文書には、会社の事業の性格を考慮して地下は除外する、立退き先の為には隣接の建物の中に必要な面積を用意することを要望するという旨が記されていた。

引越しは大事業だった。15日正午までにきれいに明け渡さなくてはならない。その頃の東京には若い者はいない。用員は年寄りばかりで、栄養も悪かったので力も出ない。何よりも飯を充分に食べさせなければ力仕事は出来ないというので八方手を尽くして闇米を買い集めた。

政府の命令では、家具類は一切置いてゆくことになっていたが、矢野一郎常務は、会社には必要な物でGHQでは使えない物も沢山ある筈、それを選別できれば双方に好都合と考え、参謀副長でG4担当のイーストウッド代將を帝国ホテルに訪ねた。そして誰か一人派遣して、不要な物に印をつけてもらうよう依頼した。

代将は即座に応諾、係官を派遣して選別させた。その結果、米軍にとって不用となった多数の家具類が移転先の京橋の第一相互館へ運ぶことが可能になった。

移転は、月曜から土曜の朝まで、昼夜となく有楽町と京橋の間を蟻の行列のように行われ、重い物は手車やリアカーを使って運び、約束の15日の正午には、念願通り城を明け渡すことが出来た。
その間、米軍側にも多くの荷物が待機している様子なので6階の役員室のフロアーを指定して早期搬入を勧め、米軍側も入居予定日前に引越しに着手した。昼間、社内はどこも大騒ぎだったが夕刻になると大分静かになり、夕食をしてから10時ごろまでイーストウッド代将たちと一緒に働くことになった。夜食にでも如何かと、矢野の妻が黒っぽい日本の粉で作ったドーナッツを重箱に詰めて届けてきたときには、居合わせた米将校たちがそれを見るなり「オー、ホームメイド、ドーナッツ」と歓声をあげ、故郷を思い出しているかのように見えた。

矢野は、イーストウッド代将に第一生命の営繕課長をしていた松本與作を紹介した。松本は、辰野葛西事務所の社員で、大正10年に完成して、東京一のビルと言われて名物ビルとなった京橋の第一相互館建設の監督を務めていた。そのあと第一生命に入社、営繕課長となり、日比谷の第一生命館建設の中心となって働いた。松本は建築資料を完全に保存していた。
「この人は、この家を作った人だから建物のことは骨の髄まで知っている。接収後も管理人として部下と共に残しても良い」と申し出ると、ぜひそうしてくれ、と言われた。

館内の部屋もいろいろと格がある。偉い将軍が10人ほど入るというので、一番上級な部屋から順番を付け、それぞれの部屋に釣り合う絨毯や家具を振り当てた案を作り渡した。難問は、マッカーサー元帥の部屋がなかなか決まらないことだった。
六階の社長室を元帥は好まない。さりとて他の人が入っては釣り合いがとれない。何としても説得してそこに収まってもらわないと全体の格好が取れないと代将に伝え、ぎりぎりの金曜日に、やっと承諾してもらえた、との返事があった。それから一挙に部屋割りが決まり、矢野は、代将とその副官三人と徹夜で部屋作りをした。

すべてに亙り、日米双方が心を通わせ事を運んだことは、永く伝えられるべきと、矢野はその時強く思った。そして、米軍の引っ越しは物を言う人もなく、静かに荷物が搬入されて消えてゆくのに対して、日本側の引っ越しは賑やかで、皆が大声を出し、まるでお祭りのようだった、と日米の引っ越しぶりが対照的なのを微笑ましく感じたのであった。

翌15日（土曜日）の正午、正式に日本政府の代表にすべて引き渡した。そしてその日の午後、一同、京橋の第一相互館に移った。幸いなことに、朝日麦酒が特別な厚意をもって、机、椅子、さらに電話機まで皆残して行ってくれたので、直ぐに月曜日

からの営業開始の準備に取り掛かれた。
　しかし、机不足は歴然としていた。そこで、GHQで机が余るようだったら、こちらに回して欲しい、と手紙を届けたところ、各部局に、火曜日の正午までに必要な机の数をしらせるように指示したので過不足が判明する、分かり次第知らせるという、返事があった。
　月曜日の早朝、矢野の電話が鳴った。少し余りそうだから、今から直ぐ20～30机を送る。受け取りの手配は良いかという思いもよらない電話が来た。路上に出て待っていると、銀座の方から米軍のトラックが机を満載して京橋を渡ってくる。どの車にも社員がニコニコして乗っていた。そして、積み出しの時にイーストウッド代将自ら、丁寧に扱うように、それでは傷がつく、などと厳しく指図されていた、と社員が教えてくれた。
　その厚意に感激していたところ、夜遅くに再び電話があり、明朝早くにまた送ると伝えてきた。その親切な心遣いに涙が零れた。かくて火曜日を待つことなく、滞りなく月曜日から営業を始めることが可能となった。

　矢野は、もしこの相互館が爆撃でやられていたら、会社はどうなったろうかと思い、慄然とせざるを得なかった。事実、爆弾が筋向いの地下鉄の入口のところに落ちたが、道路の軟土の中に奥深く入ってさく裂したために、手前だけに爆風が走って多少の被害を出しただけで済んだ。
全国にある建物は、一つも爆風に会わず、唯一、火災にあった横浜支社も、必至の消防のお陰で、ついに焼けずに残った。第一生命とは、真に幸運な会社だと矢野は思った。
なお、矢野は、この期間に日本倶楽部、日本工業倶楽部についてイーストウッド代将と折衝し、次のような結果を残した。

第一生命のすぐ隣にあった日本倶楽部が憲兵司令部に接収されることになった。行く先もなく解散を余儀なくされていたので、イーストウッド代將に第一生命がその一部を借り入れたいと申し入れた。その結果、憲兵司令部は日比谷の美松ビルに変わり、日本倶楽部は解散を免れた。
　また、日本工業倶楽部も接収されると聞き、帝国ホテルの犬丸社長と一緒にイーストウッド代将に、工業倶楽部は唯一の実業界の会合場所である、これが無くては経済界の連絡も相談も出来ないと訴えたところ、接収が取りやめになった。もし、工業倶楽部が接収されていたならば、日本の経済界は、支離滅裂の苦渋を味わわされたかもしれない、と矢野は後日振り返り言っている。
****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
住所：〒116－0001荒川区町屋3－2－1
ライオンズプラザ町屋703
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com